地球化学 **43**, 155–168 (2009) Chikyukagaku (Geochemistry) **43**, 155–168 (2009)

総説

# 走査型透過 X 線顕微鏡を用いた 隕石・彗星塵有機物の μ-XANES 分析

薮 田 ひかる<sup>\*,†</sup>・George D. CODY<sup>\*</sup>・Conel M. O'D. ALEXANDER<sup>\*</sup> A. L. David KILCOYNE<sup>\*\*</sup>・荒 木 暢<sup>\*\*</sup>・Scott A. SANDFORD<sup>\*\*\*\*</sup> (2009年1月31日受付, 2009年5月12日受理)

# New development of the study on the early solar system history through μ-XANES analyses of cometary and meteoritic organic matter using scanning transmission x-ray microscope

Hikaru YABUTA<sup>\*,†</sup>, George D. CODY<sup>\*</sup>, Conel M. O'D. ALEXANDER<sup>\*</sup>, A. L. David KILCOYNE<sup>\*\*</sup>, Tohru Araki<sup>\*\*,\*\*\*</sup> and Scott A. SANDFORD<sup>\*\*\*\*</sup>

- \* Carnegie Institution of Washington, 5251 Broad Branch Road, Washington DC 20015, USA
- \*\* Advanced Light Source, 1 Cyclotron Road, MS7 R0222, Lawrence Berkeley National Laboratory, Berkeley, CA 94720-8225, USA
- \*\*\* Toyota Central R&D Labs, Inc., 41-1, Aza Yokomichi, Oaza Nagakute, Nagakute-cho, Aichi-gun, Aichi-ken, 480-1192, Japan
- \*\*\*\*NASA Ames Research Center,

t

- Astrophysics Branch Mail Stop 245-6 Moffett Field, CA 94035, USA
- Present address; Department of Earth and Space Science, Osaka University, 1-1 Machikaneyama, Toyonaka, Osaka 560-0043, Japan

Synchrotron-based soft X-ray micro analysis is a powerful technique for the quantitative molecular characterization of submicron-sized organic samples without damage. Recent development of X-ray Absorption Near Edge Structure (XANES) spectroscopy using Scanning Transmission X-ray Microscope (STXM) has enabled the comprehensive study on the chemical history of the early solar system as recorded in organic molecules ranging from the most primitive to altered extraterrestrial materials. In this review paper we describe our two achievements: one is the results of STXM  $\mu$ -XANES analyses performed on organic-containing particles extracted from 81P/Wild 2 cometary dust tracks collected by the Stardust comet sample return mission. The XANES spectra have revealed highly complex organic structures with a large heterogeneity in heteroatom content and different functional groups, suggesting that the comet organics may have multiple precursors. Another result is the molecular spectroscopic data on meteoritic organic matter spanning various chondrite classes, groups, and petrologic types, using carbon XANES spectroscopy. The sample analyses and the kinetics through heating experiment have

 \* Carnegie Institution of Washington, 5251 Broad Branch Road, Washington DC 20015 USA
 † 現在,大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学 専攻 〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-1 shown that the intensity of  $1 \text{ s} \rightarrow \sigma^*$  exciton derived from highly conjugated sp<sup>2</sup> carbon in the type 3 + chondritic organic matter appears to quantitatively determine the parent body metamorphism.

Key words: XANES, STXM, Chondrite, Comet particle, Carbon, Organic matter, Early solar system

#### 1. はじめに

有機物(有機化合物)とは、炭素(C)を骨格とし、 主に水素 (H), 窒素 (N), 酸素 (O) 原子が多様に 化学結合した「分子」である。有機物の化学進化の観 点から太陽系の起源を理解するには「どのような種類 の分子が、どれぐらい存在するか」の理解が土台とな る。地上の実験室で展開されるこれまでの地球外有機 物研究では、始原的な炭素質コンドライトから抽出さ れた様々な有機分子の種類,量,分布,同位体組成 を,クロマトグラフィー,質量分析,核磁気共鳴 (NMR) などの化学分析法を使って明らかにしてき た。個々の研究については諸総説をご覧いただきたい (例えば Cronin and Chang, 1993; Sephton, 2002; Pizzarello et al., 2006; 藪田, 2008)。これらの研究に よって, 分子雲から太陽系が誕生する過程で単純な分 子からより複雑な分子が形成されるための反応機構に 関する重要な手がかり, また隕石母天体上で有機分子 が進化する要因となった種々の化学作用についての豊 富な知見が与えられた。

さらに最近では,種々の微小分析技術の発展と共 に,有機物の化学特徴の不均一性や多様性を検出する ことが可能になり,太陽系の起源や進化について従来 の研究では得られなかった情報を引き出すことができ るようになった。微小分析を利用した地球外有機物研 究では,例えば SIMS や nanoSIMS による同位体比 測定が比較的早い段階から行われており,太陽系が誕 生する前に形成された有機物の一部が,原始太陽系星 雲や隕石母天体で起こった変成過程の影響を受けるこ となく,当時のままの同位体組成を保持した可能性が 報告されている(例えば Messenger, 2000; Floss *et al.*, 2004; Busemann *et al.*, 2006; Nakamura-Messenger *et al.*, 2006)。

軟 X 線領域の放射光を励起線とした走査型透過 X 線顕微鏡 (Scanning Transmission X-ray Microscope, STXM) (Kilcoyne *et al.*, 2003) は、スポットサイズ が30~40 nm の X 線集東単色ビームを発生する、 1990年代に開発された新しい有機微小分析法であ

る。STXM の高い空間分解能とエネルギー分解能か ら、物質のサブミクロン領域における C, N, Oの1s 吸収端近傍構造 (X-ray absorption near edge structure, XANES) スペクトルを取得でき,「どのような 種類の分子(化学結合)が、どれぐらい存在するか」 を評価することができる。したがって、本手法は、物 質を構成する有機物の不均一性・多様性を分子レベル で解明できる利点を持ち、初期太陽系で起こった様々 な化学反応を理解する上で強力な構造分析法といえ る。我々著者らは近年、この STXM μ-XANES を用 い,81P/Wild 2彗星塵に含まれる有機物の分子的不 均一性を明らかにした (Cody et al., 2008 a)。また, 隕石有機物の研究では, グラフェン構造に由来する sp<sup>2</sup>炭素の軟X線吸収特性に注目し、母天体上におけ る熱変成の最高温度を評価した (Cody et al., 2008 b)。本論文では、この2つの成果について総括 的に解説する。

# 2.81P/Wild 2彗星塵粒子の STXM *μ*-XANES 分析

NASA が先導した81P/Wild 2彗星塵サンプルリ ターン計画「STARDUST」では、地上での化学分析 の一環として有機物分析も行われた。太陽系で最も始 原的かもしれない物質、つまり太陽系が形成された根 本となる分子雲成分とのつながりがある物質の有機化 学を解明するための研究が実施された。

#### 2.1 試料

STARDUST 探査機の回収器から抽出された彗星塵 粒子は、エポキシあるいは硫黄に包埋された後、ウル トラミクロトームで厚さ120~140 nm の薄片に調製 され、アモルファス C または SiO 支持膜付 TEM 観 察用グリッドに乗った状態で STXM  $\mu$ -XANES 分析 用に配分された。本研究では、30を超える彗星塵粒 子の STXM  $\mu$ -XANES 分析を、ローレンスバークレー 国立研究所、Advanced Light Source (ALS) ビーム ライン5.3.2. で行った。そのうち有機物が検出された 8試料 (No. 1~8) (Table 1) の分析結果について述 べる。

Table 1Sample designations for comet 81P/Wild 2 particles analyzed in this<br/>study (Cody et al., 2008 a).

Sample nomenclature consists of Generic (a name of the parent aerogel cell [C-] or a loose aerogel chip [FC-]), Track (an impact track number), Grain (number og individual grain extracted from a given track), and Mount (number of further subdivided, specific grains in a TEM grid). Reproduced by permission from Meteoritics & Planetary Science, ©2008 by the Meteoritical Society.

Sample No.	Generic	Track	Grain	Mount	Medium
1	FC12	16	1	10	Ероху
2	C2054	35	16	4	Ероху
3	C2115	22	1	5	Sulfur
4	C2054	35	10	10	Sulfur
5	C2054	35	8	8	Sulfur
6	C2044	36	1	1	Sulfur
7 <sup>a</sup>	FC9	13	1	8	Sulfur
<b>8</b> <sup>a</sup>	FC9	13	1	8	Sulfur

<sup>a</sup> These are different slices of the same particle, with significantly different cross sections and positions on the grids.

#### 2.2 81P/Wild 2彗星塵粒子の XANES スペクトル

**2.2.1 C-XANES** Fig. 1に, Wild 2彗星塵粒子試 料 (Nos. 1~8) の Carbon (C)-XANES スペクトルを 示す。また,比較のために,炭素質コンドライト (Allende (CV 3), EET 92042 (CR 2))から分離した 不溶性有機物と,無水惑星間塵 (Interplanetary dust particle, IDP) (L2011 R11; Flynn *et al.*, 2003)のC -XANES スペクトルを併示した。ピーク帰属には, 既知の有機化合物の電子エネルギー損失分光

(EELS) スペクトル (Hitchcock and Mancini, 1994; Hitchcock, 2003),および高分子のSTXM データ ベース (Dhez *et al.*, 2003)を用いた。EELS は,電 子線を固体内電子準位の励起源として用いる点,入射 電子のエネルギーが失われる量を測定する点で XANES とは異なる手法であるが,内殻励起された電 子が原子の外殻の空位軌道へ遷移する点では XANES と等価と考えてよいため,ピーク帰属を対応させるこ とができる。

まず,彗星塵粒子間で比較すると,試料毎に異なる スペクトルが得られている。例えば,試料 Nos. 2,3 のスペクトルでは,アミド基(NH<sub>x</sub>(C\*=O)C)(\* を付記した炭素原子の内殻電子励起)を示す鋭いピー クdが検出された一方で,試料 Nos. 4,5,6のスペ クトルでは,287.5 eV に脂肪族炭素(CH<sub>x</sub>-C)の存 在を示す顕著なピークcが検出された。ピークcは, 彗星塵固有の脂肪族炭素の他に,彗星塵の捕獲材とし て使われたシリカエアロジェル(空孔率が99.8%の多 孔質シリカ)由来のメチル基(Si-CH<sub>a</sub>)も含んでい るかもしれない。試料 No.5のスペクトルではカルボ ニル基 (OR(C\*=O)C) を示すピークeも検出され た。試料 Nos. 7,8のスペクトルでは芳香族炭素(C\* =C,ピークa),ニトリル基(C\*=N,ピークb), カルボニル基が類似した分布パターンで検出された。 試料 No.1のスペクトルはどの試料とも異なり,289.3 eV 付近に検出された幅広いピークfはおそらくアル コールかエーテル基(C\*H<sub>x</sub>-OR),あるいは尿素基 (NH<sub>x</sub>(C\*=O)OR)の存在を示すと推測される。

また,エポキシに包埋された彗星塵粒子のX線透 過像から,薄片作成時にエポキシに可溶な成分(Soluble phase, SP)が粒子から周辺に浸出したと考えら れる領域が見つかった(Cody et al., 2008 a;本論文で は図示せず)。この領域のC-XANES スペクトルでは カルボニル基やエーテル,アルコール基が主要なピー クであった。このスペクトルパターンはエポキシやシ リカエアロジェルのものとは異なっていたので,それ らからの汚染ではなく,おそらく彗星塵に固有の成分 であると考えられる。

Wild 2彗星塵粒子,炭素質コンドライトの不溶性有 機物,および無水 IDP L2011 R11の C-XANES スペ クトルを比較すると,Wild 2彗星塵粒子の有機物の方 が芳香族炭素の割合が低い (Fig. 1)。その一方で, Wild 2彗星塵粒子,EET 92042隕石,L2011 R11の いずれも,ニトリルとカルボニルのピーク強度が比較 的高いという共通点が見られた。

**2.2.2 N-, O-XANES** Nitrogen (N)-XANES スペクトルは, C-XANES スペクトルに相補的な情報に 加え、含窒素官能基の分布に関するより詳しい情報を 提供する。試料 Nos. 2, 3の N-XANES スペクトル





(Fig. 2) では、401.4 eV で比較的顕著なピークiが 検出されたが、これはアミド基(N\*H<sub>x</sub>(C=O)C)の 存在を示すもので、同一試料の C-XANES スペクト ルでアミド基のピークが検出された結果と調和的であ る。試料 No. 2では、399~400 eV 付近に2つのピー クgとhが検出され、それぞれイミン(C=N\*)、ニ トリル(C=N\*)基の存在を反映している。一方で 試料 Nos. 1、5、8では、~398 eV からイオン化閾値 の~405 eV にかけて、連続した X 線吸収による幅広



Fig. 2 N-XANES spectra obtained of organics associated with 81P/Wild 2 particles. Included for comparison are a spectrum of an anhydrous IDP (L2011 R11), and insoluble organic matter isolated from meteorites, CR2 (EET 92042) and CV3 (Allende). Peaks corresponding to specific functional groups are highlighted with the letters g - k. g:  $1 \text{ s-}\pi^*$ transition at  $\sim 399$  eV for imine, h:  $1 \text{ s-}\pi^*$ transition at~400 eV for nitrile, i:  $1 \text{ s-}\pi^*$ transition at~401.4 eV for amidyl nitrogen, j: 1 s- $\sigma^*/3$  p transition at ~402.5 eV for amino nitrogen, k: 1 s- $\sigma^*/3$  p transition at $\sim$ 403.5 eV for urea (Cody et al., 2008 a). Reproduced by permission from Meteoritics & Planetary Science, ©2008 by the Meteoritical Society.

い N-XANES スペクトルが得られた(Fig. 2)。エネ ルギー吸収の近い含窒素官能基が試料中に混在してい ることが推測できる。特に、イオン化閾値に近いエネ ルギー値で吸収が高かったので、アミノ(C-N\*H<sub>x</sub>、 ピーク j)、尿素(CO-N\*H<sub>x</sub>)あるいは カルバモイ ル(R-N\*H(CO)OR'、ピーク k)基といった官能基 が、イミン、ニトリル、アミド基の割合よりも多いこ とが示唆される。

EET 92042隕石と無水 IDP L2011 R11の N-

XANES スペクトルは、イミン、ニトリル、アミド基 のピークが検出された点で類似するが、アミノ基の吸 収に相当するエネルギー範囲で、EET 92042隕石で は吸収が認められ、L2011 R11では吸収に乏しいとい う違いがある。この点で、試料 No. 2の N-XANES ス ペクトルは L2011 R11に、試料 No. 5の N-XANES スペクトルは EET 92042隕石に類似している。

彗星塵粒子試料の O-XANES スペクトルでは532 eV 付近にカルボニル (O-C=O\*) のピークが現れる のみだったので, C-XANES スペクトルでカルボニル が同定されたことを確認するために用いられた。

一部のC-, N-XANESの結果からは,彗星塵と隕 石および惑星間塵の有機物との間に類似点が見られ、 互いに共通する前駆分子を持つ可能性が示された。

2.3 81P/Wild 2彗星塵粒子の元素組成と不均一性 2.3.1 N/C vs. O/C データ解析には, Henke et al. (1993) の質量吸収係数データベースを用い, C, N, O, Siの各質量吸収係数から得られる吸収係数曲 線を、各彗星塵試料の C-, N-, O-XANES スペクト ルを足し合わせたものにフィッティングさせた。Si の吸収係数曲線を加えたのは、試料の XANES スペ クトルにシリカエアロジェル由来のSiとOが寄与し ているからである。スペクトルフィッティングから C, N, O, Si のそれぞれが寄与する割合を求め, 元 素組成を求めた。得られた元素組成から、エポキシと シリカエアロジェル (SiO<sub>2.13</sub>) による O の寄与を差し 引き,最終的に彗星塵に固有の元素組成を見積もっ た。Fig. 3に各彗星塵粒子の N/C-O/C 比プロットを示 す。タイプ1-3コンドライトの不溶性有機物(Alexander et al., 2007) と無水 IDP L2011 R11 (Feser et al., 2003)の比も併せて示した。

Fig. 3より、いずれのWild 2彗星塵粒子のN/C比 もコンドライト隕石中の有機物の値より大きいことが 分かる。C-、N-XANESスペクトル(Figs. 1, 2)か ら明らかになったように、Wild 2彗星塵粒子の有機物 は窒素に富む官能基を多種含むことを定量的に明示し た結果といえる。

一方で,Wild 2彗星塵粒子のO/C比は、コンドライト隕石中の有機物の値より高いもの(試料 Nos. 1,
4,5)もあれば、同等のもの(試料 Nos. 2, 3, 7,
8)もあった。そして、殆どの彗星塵粒子試料のO/C比が無水 IDP L2011 R11のO/C比よりも低かった(Fig. 3)。もし、無水 IDPが彗星起源の成分を含んでいると仮定するならば(Brownlee *et al.*, 1995;



Fig. 3 Atomic N/C versus O/C derived from C-, N-, and O-XANES of organics associated with 81P/Wild 2 particles (□). Included are elemental data for meteoritic organic matter isolated from types 1, 2, and 3 chondrites (■) and the anhydrous IDP L20211 R11 (◆) (Cody et al., 2008 a). Reproduced by permission from Meteoritics & Planetary Science, ©2008 by the Meteoritical Society.

Rietmeijer, 1998), この O/C 比の結果は, エアロ ジェルが彗星塵を捕獲した時の衝撃エネルギーによっ て塵中の有機物が変成し, O の割合が減少したと解 釈することができるだろう。しかし, 無水 IDP は大 気圏突入時に熱変成を経験している(Flynn *et al.*, 2003; Keller *et al.*, 2004)ことに留意すると, L2011 R11の O/C 比は二次的に生じた O を含むのかもしれ ない。Wild 2彗 星 塵 粒 子 の N/C, O/C 比 は, 1 P/ Halley 彗星 の CHON 粒子 の 値 (O/C = 0.2, N/C = 0.04)(Kissel and Kruger, 1987)よりも高かった。 1 P/Halley 彗星は100回以上も太陽を周回した結果, 太陽熱による加熱をより受けた天体と考えられている ので, 酸素, 窒素に富むもともとの成分が熱によって 失われた結果の表れであるかもしれない。

Wild 2彗星塵粒子に含まれる有機物の元素組成が, 果たして固有のものであるか試料捕獲時の二次的な影響によるものかを判別することは,現段階では難しい。そうはいっても,ある単一の有機物が熱的変化を受けると,その元素組成の変化はある傾向を持った軌跡を表し(例えば,隕石有機物;Alexander *et al.*, 2007), Fig. 3のように散らばった分布にはならない のが一般的である。むしろ, Figs. 1, 2, 3で明らかと なった試料間の分子的不均一性は鉱物学(Brownlee et al., 2006), 化学(Flynn et al., 2006; Sandford et al., 2006), 同位体(McKeegan et al., 2006) 的不均 一性と調和的であり, Wild 2彗星塵に固有な特徴とい えるようである。特に, 窒素と酸素を含む官能基の種 類と割合に多様性が見出されたことから, Wild 2彗星 塵粒子中の有機物は複数の異なる前駆物質を持つ可能 性が考えられる。例えば, 彗星塵粒子試料 No. 1が比 較的単純なポリマーに見られるような官能基組成を有 し, 他の試料とかけ離れている点に注目してみると (Fig. 1), その分子構造はホルムアルデヒドあるい

はホルムアルデヒドと尿素の重合体に由来するポリオ キシメチレンに似たものであるかもしれない。

彗星塵粒子試料から検出されたこれらの有機物は, 彗星の形成過程で生じたのだろうか,それとも彗星塵 の捕獲時に低分子量の前駆物質が反応して生じたのだ ろうか。この問いに答えるためには,さらに多くの試 料を調査する必要があるだろう。

2.3.2 彗星塵粒子内での不均一性 前述の通り, IDP や隕石有機物では,同一試料中のサブミクロン 領域で同位体比の空間的不均一性が検出されている

(e.g., Keller et al., 2004; Busemann et al., 2006)。 Wild 2彗星塵粒子の同位体分析でも、試料内にお ける H/D や<sup>15</sup>N/<sup>14</sup>N の不均一性が明らかとなった (McKeegan et al., 2006)。Wild 2彗星塵粒子の XANES 分析では,同じ粒子から得られた2つの異な る薄片を試料 Nos. 7,8として測定している。両試料 の C-,N-XANES スペクトルは互いに似ていたが, 全く同じという訳ではなかったので(Figs. 1, 2), 同一の Wild 2彗星塵粒子中の有機物の分子構造もま た,微小なスケールにおいて不均一である可能性があ る。

このような試料内での不均一性が Wild 2彗星塵粒 子の XANES 分析で最も著しく確認されたのは試料 No.5であった。Fig.4aに,STXMで得られた,試 料 No. 5の X 線吸光度画像を示す。1つの粒子内で吸 光度に違いが見られ、特に中央部(Center Band)で 吸収がとても高くなっている。吸光度の違いは彗星塵 の有機構造的な違いであるというよりは、炭素の密度 もしくは有機物とエアロジェルの混合度の違いが関係 しているのだろう。そこで, 試料 No.5の全体部 (Whole Particle), Center Band, 周辺部 ("Lobe" Region)のC-, N-, O-XANES分析を行い, スペク トルフィッティングから Si/C 比を見積もったとこ ろ, Center Band で Si/C=0.88, Lobe Region で Si/ C=0.51であった。よって吸光度の違いはシリカの含 有量の違いによることが証明されたのだが、本研究で はさらに、N/C 比と O/C 比も Center Band と Lobe Region で異なることが分かったのである (Fig. 4 b)。 Center Band の方が Lobe Region よりも N/C 比が高 い。Fig. 5に Center Band と Lobe Region  $\mathcal{O}$  C-, N-



Fig. 4 a) An optical density image on the carbon (1 s) absorption edge of sample No. 5. b) Elemental data (N/C and O/C) from the "lobe region" and the "center band" (Cody *et al.*, 2008 a). Reproduced by permission from Meteoritics & Planetary Science, ©2008 by the Meteoritical Society.



Fig. 5 a) C-XANES spectra of sample No. 5 "lobe" (bottom) and "center band" (top). b) N-XANES spectra of sample No. 5 "lobe" (bottom) and "center band" (top) (Cody *et al.*, 2008 a). Reproduced by permission from Meteoritics & Planetary Science, ©2008 by the Meteoritical Society.

XANES スペクトルをそれぞれ示す。2つの領域にお いて C-XANES スペクトルはほとんど違いが見られ ないが、N-XANES スペクトルは非常に異なってい た。その違いはスペクトルの相対強度だけでなく、イ ミンやニトリルなどの、不飽和結合を持つ含窒素官能 基(ピークg)が Center Band では存在するが Lobe Region では存在しないという点にも見出された。

試料 No. 5以外の彗星塵粒子試料も調べると,N/C 比と Si/C 比との間に相関性はなかった。試料 No. 5 のような含窒素官能基の不均一性はこれまでの地球外 有機物研究では検出されなかったものであり,その起 源について今後の解明が進められる。

# Type 3+コンドライト有機物による 母天体熱変成の温度評価

コンドライト隕石が岩石学的タイプごとに細分類さ れているのは、初期太陽系で起こった熱変成の結果で ある。これらの岩石学的分類を熱変成イベントの温度 履歴に位置付けることにより、ダスト付着過程や母天 体内部構造、あるいは微惑星の大きさや熱源の評価に 関する重大な知見がこれまでにも提示されてきた。し かしながら、コンドライトの多くが非平衡な隕石であ るため、それらの変成度を評価するのは容易でない。 例えば CV 3コンドライトの Allende 隕石が経験した 最高温度については、その鉱物・化学分析などから決 定された値は325°C(Rietmeijer and Mackinnon, 1985)から600°C(Huss and Lewis, 1994)までと非 常に幅広い。本章では,隕石有機物の軟X線吸収特 性による母天体熱変成の温度評価について述べる。

#### 3.1 試料

試料には、様々な隕石グループおよび岩石学的タイ プ(1~4)に属する25種のコンドライト隕石が用い られた(Table 2)。CsF/HF 溶液を用いて(Cody *et al.*, 2002)各隕石粉末から分離、精製された不溶性有 機物は、2.1.で先述した方法と同様に薄片に調製さ れ、SiO 支持膜 TEM 観察用グリッドに用意された。

## 3.2 Type 3+コンドライト隕石有機物のC-XANES スペクトル

Fig. 1に見られたように、C-XANES スペクトルで は、各官能基に由来する1s→π\*遷移は比較的エネル ギーの低い285~290 eVの範囲で検出され、イオン 化閾値(~290.5 eV)を越えた高エネルギー領域では 特徴のない幅広い吸収が見られるのが一般的である。 しかし,例外的に,高度に共役した sp<sup>2</sup>炭素の直線あ るいは平面構造の C-XANES スペクトルでは、1s→  $\sigma^*$ への遷移を表す Frenkel-type 励起子 (exciton) の鋭い吸収ピークが291.63 eV に現れる (Ma et al., 1993; Brühwiler et al., 1995)。例えばグラフェン シートが代表的な分子構造である。それを基本構造に 持つグラファイトやカーボンナノチューブのC-XANES スペクトルで1 s→ $\sigma^*$  exciton は検出され る。また、非晶質のガラス状炭素にも1 s→ $\sigma^*$  exciton は検出されることが知られている (Cody et al., 2008 b) o

Fig. 6 a は、タイプ3以上の(3+) コンドライトか ら分離された不溶性有機物の C-XANES スペクトル で1 s→ $\sigma^*$  exciton が検出されたことを示している。 Fig. 6 b は Fig. 6 a を微分したスペクトルで、1 s→ $\sigma^*$ exciton のピーク強度がより明瞭に確認できる。一方 で、タイプ3+コンドライトのうち最も始原的な Semarkona (LL 3.0)、ALHA 77307 (CO 3.0) 隕 石、 およびタイプ1、2コンドライトの C-XANES スペク トルでは、1 s→ $\sigma^*$  exciton はほとんど認められなかっ た。本研究では、Fig. 6 b の微分スペクトルにおける グラファイトの1 s→ $\sigma^*$  exciton 強度を100%、EET 92042 (CR 2) 隕石の1 s→ $\sigma^*$  exciton 強度(最小) を0%として正規化し、全25種の隕石有機物について 1 s→ $\sigma^*$  exciton 強度を見積もった(Table 2)。

Table 2Sample ID,  $1 \text{ s-}\sigma^*$  intensities, and estimated temperatures (Cody *et al.*, 2008 b).Reproduced by permission from Meteoritics & Planetary Science, ©2008 by the Meteoritical Society.

Sample No.	Meteorite name	Abbreviation	n Meteorite group	% Exciton intensity	$T_{\rm EFF}^{\circ}{\rm C}$	$T^a \circ C$ literature
1	EET92042	E92	CR2	0.0	~ 0	
2	Bells	Bel	CM2	$0.8 \pm 2.2$	$77\pm93$	
3	Murchison	Mur	CM2	$1.1 \pm 1.5$	$96\pm65$	
4	Orgueil	Org	CI1	$1.2 \pm 1.7$	$101\pm68$	
5	Tagish Lake	Tag	C2	$1.8 \pm 1.4$	$129\pm46$	
6	GRO95577	G95	CR1	$3.0 \pm 2.5$	$171\pm 64$	
7	ALHA77307	A773	CO3.0	$4.2 \pm 1.8$	$203\pm41$	$\sim 200$
8	Semarkona	Sem	LL3.0	$4.2 \pm 2.6$	$203\pm58$	200 - 260
9	MET00452	M452	LL3.05	$4.2 \pm 3.3$	$203\pm70$	
10	Y86720	Y86	CM Heated	$7.1 \pm 2.4$	$265\pm42$	<sup>b</sup> 400 - 850
11	Kaba	Kab	CV3.1	$13.8 \pm 2.5$	$371\pm34$	300 - 400
12	Vigarano	Vig	CV3.1/3.4	$17.1 \pm 1.2$	$415\pm25$	300 - 400
13	Krymka	Kry	LL3.1	$17.2 \pm 1.9$	$416\pm31$	
14	Mokoia	Mok	CV3.2/3.6	$17.7 \pm 1.7$	$423\pm29$	300 - 400
15	ALHA77003	A770	CO3.5	$17.9 \pm 4.3$	$425\pm56$	475 - 540
16	Leoville	Leo	CV3.1/3.4	$18.6 \pm 3.8$	$434\pm50$	~ 250
17	MET00489	M489	L3.6	$18.7 \pm 3.1$	$435\pm42$	
18	Kainsaz	Kai	CO3.2/3.6	$20.2\pm1.8$	$453\pm29$	~ 300
19	WSG95300	W953	H3.3	$21.1 \pm 3.9$	$464\pm50$	
20	Tieschitz	Tie	H/L3.6	$21.3 \pm 2.6$	$467\pm36$	
21	Chainpur	Cha	LL3.4	$22.7 \pm 5.3$	$483\pm63$	
22	Bishunpur	Bis	LL3.15	$28.8 \pm 2.6$	$551\pm34$	300 - 350
23	Allende	All	CV3.2/>3.6	$29.1 \pm 1.3$	$554\pm25$	325 - 600
24	Isna	Isn	CO3.7-3.8	$43.2 \pm 3.1$	$700\pm37$	480 - 700
25	Indarch	Ind	EH4	$68.0\pm4.5$	$948 \pm 50$	~ 640
G	Graphite	Gr		100.0		

<sup>a</sup> Mineralogical and geochemical T estimates, Huss et al. (2006) and references therein.

<sup>b</sup> Y86720 is a heated CM, T<sub>EFF</sub> estimates are derived from mineral alteration kinetics (Akai, 1992).

## 3.3 1 s→σ\* exciton の強度と母天体熱変成との 関係

Table 2に見られるように、 $1 s \rightarrow \sigma^*$  exciton の強度 は、隕石中の不溶性有機物が経験した母天体熱変成の 度合いと関係している可能性が高い。 $1 s \rightarrow \sigma^*$  exciton 強度を、鉱物・化学的に見積もられた母天体変成の最 高温度に対してプロットしてみると(Fig. 7)、熱変 成を経験していないタイプ1、2コンドライトの不溶 性有機物はグラフの原点近くに集まったが、タイプ 3+コンドライトの不溶性有機物については、 $1 s \rightarrow \sigma^*$ exciton 強度と母天体変成温度との間には明らかな相 関があった。

そこで本研究では、 $1 s \rightarrow \sigma^*$  exciton の強度が母天体 上の熱変成の度合いを反映する"温度計"となりうる かどうかを検証するため、Murchison 隕石 (CM 2) の不溶性有機物を600°C、1000°C、1400°C で各10秒 間加熱した。その結果、Murchison 隕石の1 s→ $\sigma^*$  exciton 強度は温度の上昇に伴い高くなり、CV 3.1コン ドライトの1 s→ $\sigma^*$  exciton 強度に近づいた。さらに 様々な温度(600°C, 800°C, 1000°C),時間(100 s-10<sup>12</sup>s)で加熱実験を行ったところ,Fig.8に示したように,各加熱温度について1 s→ $\sigma^*$  excitonの強度と加熱時間の間に直線関係が得られた。1 s→ $\sigma^*$  exciton強度の温度依存性変化係数を  $\xi$  とすると,Fig.8より次式が与えられる;

$$\ln \xi = A + E_A^* / RT \tag{1}$$

T は温度,A = 1.504,  $E_{A}^{*} = ~18 \text{ kJ}$  である。ここで もし、母天体上で10<sup>7</sup>年間等温過程が続いたと仮定し

(Brearley and Jones, 1998), Fig. 8より各隕石が経 験した有効温度 TEFF を求めると,例えば Allende 隕 石の  $T_{\text{EFF}}$  は~893°C となり (Fig. 7の曲線 A),過去 の研究で評価された最高温度 (600°C, Huss and Lewis, 1994) よりも非常に高くなってしまう。この 過剰評価は,実際の母天体環境と単純な実験系との明 らかな相違から生じると考えられる。そこで本研究で は,母天体が経験した温度について過去に報告されて いる値に基づき(1)式を較正することにした。例え



Fig. 6 (a) C-XANES spectra of type 3 + chondrites spanning the CO, CV, Ordinary, and enstatite chondrites groups. A reference spectrum of graphite is included on top. (b) The first derivative of the C-XANES spectra (from 289 to 300 eV) (Cody *et al.*, 2008 a). Reproduced by permission from Elsevier.

ば、Fe/Mg 拡散プロファイルを用いて評価された Allende 隕石の  $T_{\text{EFF}}$  値 (327°C; Weinbruchand Muller, 1994)を本研究に適用すると、(1)式でA = 3.263と なり Fig. 7の曲線 C が得られる。しかしこの評価で は、ほとんどの隕石が、過去の研究で評価された最高 温度よりもかなり低く見積もられた(Fig. 7)。

そこで今度は、オリビン/スピネル間元素分配に基 づく普通コンドライト(タイプ3~6)の温度決定法 (Wlotzka, 2005)を使って(1)式を較正した。本研究 で用いた試料のうち Isna 隕石 (CO 3.8)を電子プ ローブマイクロアナライザー(JEOL 製, Superprobe)で測定し、オリビン-スピネル間の Fe/Mg分 配係数 K<sub>D</sub> ((Mg/Fe)<sub>olivin</sub>/(Mg/Fe)<sub>spinel</sub>)とスピネル中 の Cr/(Cr+Al)比を求め、Wlotzka の式にしたがい 両者の値をプロットした結果、それらは700°C の等温 線上に位置した。この結果は Wlotzka (2005)が複 数の普通コンドライト (タイプ3.7~3.9)についた見 積もった温度範囲 (625~745°C)に一致した。した がって本研究では、Isna 隕石が経験した温度を700°C と仮定した上で(1)式の較正を行い (A = 2.26)、Fig.7 の曲線Bを得、 $1 s \rightarrow \sigma^*$  exciton 強度から各隕石の  $T_{\text{EFF}}$ を求めた (Table 2)。

その結果,見積もられた TEFF の値の多くが,鉱物・ 化学的に見積もられた値の範囲内に良くおさまった (Table 2)。特に、 $1 s \rightarrow \sigma^*$  exciton 強度の高いタイ プ3+コンドライトの方が、その強度が低いタイプ1、 2コンドライトに比べて正確さが高いようである。ま た, Fig. 8から分かるように,  $1 s \rightarrow \sigma^*$  exciton の強度 変化は対数線形の反応速度を表しているので、仮に母 天体で熱変成が起こった期間が10<sup>6</sup>年であっても、10<sup>8</sup> 年であっても,T<sub>EFF</sub>の見積もりは30°C ぐらいしか誤 差が生じないことも指摘しておきたい。ただし, Yamato 86720隕石のように短期的な熱変成を経験し た CM コンドライトについては、他の隕石とは異な る熱変成メカニズムを考慮する必要がある。例えば, 有機物の1 s→σ<sup>\*</sup> exciton 強度による評価と鉱物学的 評価の比較から、衝撃による熱変成と母天体内部で起 こる熱変成との区別が可能になるかもしれない。

**3.4 1 s→σ<sup>\*</sup> exciton 強度が示す有機構造変化** コンドライト隕石中の不溶性有機物の C-XANES



Fig. 7 The correlation between normalized exciton intensity (%) and various estimates of temperature (gray bars). Included is a single estimate for a temperature of Isna (black star) employing Fe/Mg partitioning between olivine-spinel grains. The petrologic type 1 and 2 chondrites in this study all fall into the gray region at the origin of the plot. Curves A, B, and C plot the predicted relationship between exciton intensity and temperature derived from the thermo-kinetic experiments. Curve A uses as determined kinetic parameters. Curves B and Care calibrated assuming that Isna's  $T_{\rm EFF} = 700^{\circ} \rm C$ and Allende's  $T_{\rm EFF} = 325^{\circ} C$ , respectively (Cody et al., 2008 b). Reproduced by permission from Elsevier.

スペクトルにおける1 s→ $\sigma^*$  exciton のピーク強度の 変化から,母天体での熱変成の進行に伴い,隕石有機 物中の高度に共役した sp<sup>2</sup>炭素が平面方向に増大する ことが明らかとなった。本研究ではまた,幾つかのタ イプ3+コンドライトの不溶性有機物の固体<sup>13</sup>C NMR スペクトルで常磁性シフトを確認している(Cody *et al.*,2008 b)。常磁性シフトはπ電子系を持つ電気伝 導体の有機分子によく見られる(Rybaczewski *et al.*, 1976)。タイプ3+コンドライトの不溶性有機物で は、この常磁性シフトと C-XANES の1 s→ $\sigma^*$  exciton 強度との間に直線関係が得られたので,熱変成を経験 した有機物ほどその電子構造は絶縁性から導電性へ変 化することが考えられる。また,隕石有機物のX線 回折では、1 s→ $\sigma^*$  exciton の強度に関わらず、どの 試料もガラス状炭素に見られるような幅広いスペクト



Fig. 8 The experimentally observed Log-linear time-temperature development of the 1 s→ σ<sup>\*</sup> exciton in insoluble organic matter from IOM upon heating to 600 (■), 800 (■), and 1000 (□) °C for various times (Cody *et al.*, 2008 b). Reproduced by permission from Elsevier.



Fig. 9 X-ray diffraction data for a subset of IOM analyzed in this study (Cody *et al.*, 2008 b). Reproduced by permission from Elsevier.

ル (d 002=~3.7 Å) が得られた (Fig. 9)。グラファ イトの鋭いピークを持ったスペクトル (d 002=3.35 Å) とは対照的である。この結果から,熱変成に伴う 有機物の1 s→ $\sigma^*$  exciton 強度の増大は"グラファイ ト化 (黒鉛化)"とは関連がないことが示される。

"グラファイト化"に言及すると、この用語は「炭素六角網面および積層規則性の成長」を指す(三宅ら、1998)。本研究における、 $1 s \rightarrow \sigma^*$  exciton 強度が反映する sp<sup>2</sup>炭素の平面方向への増大は、グラフェ

ン構造の増大、つまり前者の「炭素六角網面の成長」 に相当する。しかしながら、この現象は「積層規則性 の成長」とは関連しない。この点で、本研究結果はグ ラファイト化の定義の十分条件には一致しない。一般 に、ある前駆物質を2000~3000°C で加熱するとグラ ファイト化が起こると理解されている (Fishbach, 1971; Pacault, 1971)。しかし, 隕石母天体上の熱変 成における温度は最高でも800~900℃であり、グラ ファイト化が起こるような温度とは程遠い。また、い かなる有機化合物も高温で加熱すればグラファイト化 するという訳ではなく、例えばポリサッカライドやポ リ塩化ビニリデンなどは、加熱温度が2000°Cを超え てもグラファイト化は起こらずにガラス状炭素に変化 する (Franklin, 1951)。低品位炭を3000°C で加熱し てもグラファイト化しない (Cody et al., 2008 b)。地 球物質の研究では, 有機物が比較的低い温度条件でグ ラファイト化した例が示されているが、このような報 告は地球のテクトニクスで変成した岩石に限られてい る (Mählmann et al., 2002)。その他, 地球内部の流 体に含有される CH<sub>4</sub>や CO<sub>2</sub>が高い圧力を受けてグラ ファイト化が起こったとされる報告もある(Rumble et al., 1986)。しかし、これらの現象に必要とされる 圧力条件は、地球に比べサイズの小さい(半径~100 km) 隕石母天体では主要なものではない。以上を総 合すると, 隕石母天体上の熱作用によって有機物がグ ラファイト化するのはおそらく不可能である。TEM を用いた研究においても, Allende 隕石の不溶性有機 物構造はむしろ非グラファイト質であると考察されて おり (Harris et al., 2000),本研究における評価と一 致している。

#### 4.まとめ

(1) STXM µ-XANES の利用によって,81P/Wild 2 彗星塵の有機物は酸素と窒素に富んだ多様に官能基か ら成る,非常に複雑な分子構造を持つことが判明し た。特に,彗星塵粒子によって元素組成が広範囲かつ 不規則に分布したことは注目すべき結果である。 Fig. 3に基づくと,81P/Wild 2彗星塵の有機物の化学 特徴は少なくとも3つに分類することができる;

- ・酸素と窒素にある程度富み、始原的な炭素質コンド
   ライトの有機物と官能基組成の類似性が見られる試料(Nos. 4, 5, 7, 8)
- ・非常に窒素に富み、酸素も中程度に含む試料 (Nos. 2, 3)

 ・非常に酸素に富み、窒素も中程度に含む試料 (No.1)

Wild 2彗星塵粒子中の有機物は複数の異なる前駆物 質を持つ可能性が示唆された。

これらはあくまで8試料からの結論であるので,今後もっと数多くの試料を分析することによって,81P /Wild 2彗星塵有機分子構造の大幅な不均一性,統計 的に信用性の高い81P/Wild 2彗星塵有機物像,また エアロジェルに捕獲された際の化学的影響,について の理解を深めることが次なる課題である。

(2) コンドライト隕石中の不溶性有機物の STXM μ-XANES 分析で, グラフェン構造の割合を反映する1s →σ\* exciton の強度が隕石母天体上の熱変成の進行 に伴い大きくなることが明らかとなり, その強度から 熱変成温度を定量的に決定できることが提示された。 熱作用による有機分子の変化は不可逆的であるため, 熱変成の進行を正確に測るのに適していると考えられ る。また, タイプ1, 2コンドライトがタイプ3+コン ドライトに熱的進化する可能性を明示し, あらゆる隕 石有機物は低温環境で形成されたことを裏付けた。

STXM μ-XANE の利用によって、非常に始原的な ものから著しい変成を経験したものまで広範囲に渡る 地球外有機物研究が可能となり、太陽系の起源と進化 に関わる有機物の化学進化を総合的に議論することが できるようになった。この利点を生かして、将来、日 本の始原天体探査において入手することができるだろ う未知なる貴重な地球外試料の有機物分析の実現に、 本手法が一層貢献できることを期待したい。

#### 謝 辞

スターダストミッションに関わられた全ての方々に 御礼申し上げます。特に,NASAジョンソン宇宙セ ンターの Mike Zolensky博士と中村圭子博士には, 細心の配慮をもって81P/Wild 2彗星塵試料を調整頂 きました。隕石有機物の試料調製と加熱実験に必要な 機器を提供してくださいましたカーネギー研究所の Larry Nittler博士と Bjorn Mysen博士に御礼申し上 げます。本論文を査読くださり有益なコメントをくだ さいました北海道大学の沢田健先生と1名の匿名査読 者に御礼申し上げます。本論文執筆の機会を与えてく ださいました北海道大学の圦本尚義先生に深く感謝申 し上げます。

### 文 献

- Akai, J. (1992) T-T-T diagram of serpentine and saponite, and estimation of metamorphic heating degree of Antarctic carbonaceous chondrites. Sixteenth Symposium on Antarctic Meteorites. Proceedings of the NIPR Symposium 5, 120-135.
- Alexander, C. M. O'D., Fogel, M., Yabuta, H. and Cody, G. D. (2007) The origin and evolution of chondrites recorded in the elemental and isotopic compositions of their macromolecular organic matter. *Geochimica et Cosmochimica Acta* 71, 4380-4403.
- Brearley, A. J. and Jones, R. H. (1998) Chondritic meteorites. In: *Planetary Materials vol. 36* (ed. Papike, J. J.), Mineralogical Society of America, 3: 1–3: 398.
- Brownlee, D. E., Joswiak, D. J., Schlutter, D. J., Peppin, R. O., Bradley, J. P. and Love, S. G. (1995) Identification of individual cometary IDPs by thermally stepped He release (abstract). 26th Lunar and Planetary Science Conference, 183–184.
- Brownlee, D. E. and Stardust preliminary examination team (2006) Comet 81P/Wild 2 under a microscope. *Science* **314**, 1711–1716.
- Brühwiler, P. A., Maxwell, A. J., Puglia, C., Nilsson, A., Andersson, S. and Martensson, N. (1995)  $\pi^*$ and  $\sigma^*$  excitons in C 1 s absorption of graphite. *Physical Review Letters* **74**, 614–617.
- Busemann, H., Young, A. F., Alexander, C. M. O'D., Hoppe, P., Mukhopadhyay, S. and Nittler, L. R. (2006) Interstellar chemistry recorded in organic matter from primitive meteorites. *Science* **312**, 727–730.
- Cody, G. D., Alexander, C. M. O'D. and Tera, F. (2002) Solid-state (<sup>1</sup>H and <sup>13</sup>C) nuclear magnetic resonance spectroscopy of insoluble organic residue in the Murchison meteorite: A selfconsistent quantitative analysis. *Geochimica et Cosmochimica Acta* 66, 1851–1865.
- Cody, G. D., Ade, H., Alexander, C. M. O'D., Araki, T., Butterworth, A., Fleckenstein, H., Flynn, G.

J., Gilles, M. K., Jacobsen, C., Kilcoyne, A. L. D., Messenger, K., Sandford, S. A., Tyliszczak, T., Westphal, A. J., Wirick, S. and Yabuta, H. (2008 a) Quantitative organic and light element analysis of comet Wild 2 particles using C-, N-, and O-μ-XANES. *Meteoritics and Planetary Science* **43**, 353–365.

- Cody, G. D., Alexander, C. M. O'D., Yabuta, H., Kilcoyne, A. L. D., Araki, T., Ade, H., Dera, P., Fogel, M., Militzer, B. and Mysen, B. O. (2008 b) Organic thermometry for chondritic parent bodies. *Earth and Planetary Science Letters* 272, 446–455.
- Cronin, J. R. and Chang, S. (1993) Organic matter in meteorites: Molecular and isotopic analyses of the Murchison meteorite. In: *The Chemistry* of Life's Origins (eds. Greenberg, J. M., Mendoza-Gomez, C. X. and Pirronello, V.), Kluwer, Dordrecht, Netherlands, 209–258.
- Dhez, O., Ade, H. and Urquhart, S. (2003, 5, 26) Database of calibrated NEXAFS spectra of some common polymers. http://www.physics.ncsu.edu /stxm/polymerspectro
- Feser, M., Wirick, S., Flynn, G. J. and Keller, L. P. (2003) Combined carbon, nitrogen, and oxygen XANES spectroscopy on hydrated and anhydrous interplanetary dust particles (abstract, #1875). 34th Lunar and Planetary Science Conference, CD-ROM.
- Fishbach, D. B. (1971) The Kinetics and mechanism of graphitization. In: *Chemistry and Physics of Carbon vol.* 7 (ed. Walker, P. L.), Marcel Dekker Inc., New York, 1–106.
- Floss, C., Stadermann, F. J., Bradley, J., Dai, Z. R., Bajt, S. and Graham, G. (2004) Carbon and Nitrogen Isotopic Anomalies in an Anhydrous Interplanetary Dust Particle. *Science* **303**, 1355– 1358.
- Flynn, G. J. and Stardust elemental compositions preliminary examination team (2006) Elemental compositions of comet 81P/Wild 2 samples collected by Stardust. *Science* **314**, 1731–1735.
- Flynn, G. J., Keller, L. P., Feser, M., Wirick, S. and Jacobsen, C. (2003) The origin of organic matter

in the solar system: evidence from the interplanetary dust particles. *Geochimica Cosmochimica Acta* **67**, 4791–4806.

- Franklin, R. E. (1951) Crystalline growth in graphitizing and non-graphitizing carbons. Proceedings of the Royal Society of London 209, 196– 218.
- Harris, P. J. F., Vis, R. D. and Heymann, D. (2000) Fullerene-like carbon nanostructures in the Allende meteorite. *Earth and Planetary Science Letters* 183, 355–359.
- Henke, B. L., Gullickson, E. M. and Davis, J. C. (1993) X-ray interactions: Photoabsorption, scattering, transmission, and reflection at E =50-30,000 eV, Z = 1-92. Atomic Data and Nuclear Data Tables **54**, 181–342.
- Hitchcock, A. P. and Mancini, D. C. (1994) Bibliography and databases of inner shell excitation spectra of gas phase atoms and molecules. *Jour*nal of Electron Spectroscopy 67, 1–123.
- Hitchcock, A. P. (2003. 9, 14) Gas phase core excitation database. http://unicorn.mcmaster.ca/ corex/cedb-title.html
- Huss, G. R. and Lewis, R. S. (1994) Noble gases in presolar diamonds. II. Component abundances reflect thermal processing. *Meteoritics* 29, 811– 829.
- Huss, G. R., Rubin, A. E. and Grossman, J. N. (2006) Thermal Metamorphism in Chondrites. In: *Me*teorites and the Early Solar System II (eds. Lauretta, D. S. and McSween, H. Y., Jr.), Univ. of Arizona, USA, 567–586.
- Keller, L. P., Messenger, S., Flynn, G. F., Clemett, S., Wirick, S. and Jacobsen, C. (2004) The nature of molecular cloud material in interplanetary dust. *Geochimica et Cosmochimica Acta* 68, 2577–2589.
- Kilcoyne, A. L. D., Tyliszczak, T., Steele, W. F., Fakra, S., Hitchcock, P., Franck, K., Anderson, E., Harteneck, B., Rightor, E. G., Mitchell, G. E., Hitchcock, A. P., Yang, L., Warwick, T. and Ade, H. (2003) Interferometer controlled scanning transmission X-ray microscopes at the Advanced Light Source. Journal of Synchrotron

Radiation 10, 125–136.

- Kissel, J. and Kruger, F. R. (1987) The organic compoment in dust from comet Halley as measured by the PUMA mass spectrometer on board Vega 1. Nature **326**, 755–760.
- Ma, Y., Skytt, P., Wassdahl, N., Glans, P., Mancini, D. C., Guo, J. and Nordgren, J. (1993) Core excitons and vibronic coupling in diamond and graphite. *Physical Review Letters* **71**, 3725– 3728.
- Mählmann, R. F., Petrova, T. V., Pironon, J., Stern,
  W. B., Ghanbaja, J., Dubessy, J. and Frey, M. (2002) Transmission electron microscopy study of carbonaceous material in a metamorphic profile from diagenesis to amphibolite facies. Schweizerische Mineralogische und Petrographische Mitteilung 82, 253-272.
- McKeegan, K. D. and Stardust isotopes preliminary examination team (2006) Isotopic compositions of cometary matter returned by Stardust. *Science* **314**, 1724–1727.
- Messenger, S. (2000) Identification of molecularcloud material in interplanetary dust particles. *Nature* 404, 968–971.
- 三宅幹夫・吉澤徳子・光来要三・岩下哲雄・鏑木裕・ 寺井隆幸・逆井基次・京谷隆・中原雅則・西澤 節・澤田吉裕・田邊靖博・三原章・大谷朝男・羽 鳥浩章・金子克美・瀬戸山徳彦・味曽野伸司 (1998)新・炭素材料入門,炭素材料学会編, リアライズ理工センター,1-234.
- Nakamura-Messenger, K., Messenger, S., Keller, L. P., Clemett, S. J. and Zolensky, M. E. (2006) Organic globules in the Tagish Lake meteorite: Remnants of the protosolar disk. *Science* 314, 1439–1442.
- Pacault, A. (1971) The kinetics of graphitization. In: Chemistry and Physics of Carbon vol. 7 (ed. Walker, P. L.), Marcel Dekker Inc., New York, 107–154.
- Pizzarello, S., Cooper, G. W. and Flynn, G. J. (2006) The nature and distribution of the organic material in carbonaceous chondrites and interplanetary dust particles. In: *Meteorites and the Early Solar System II* (eds. Lauretta, D. S. and

McSween, H. Y., Jr.), Univ. of Arizona, USA, 628–651.

- Rietmeijer, F. J. M. (1998) Interplanetary dust particles. In: *Planetary materials* (ed. Papike, J. J.), *Reviews in Mineralogy* 36, 95.
- Rietmeijer, F. J. M. and MacKinnon, I. D. R. (1985) Poorly graphitized carbon as a new cosmothermometer for primitive extraterrestrial materials. *Nature* 315, 733–736.
- Rumble, D., Duke, E. F. and Hoering, T. L. (1986) Hydrothermal graphite in New Hampshire: evidence of carbon mobility during regional metamorphism. *Geology* 14, 452–455.
- Rybaczewski, E. F., Smith, I. S., Garito, A. F., Heeger, A. J. and Sibernagel, B. D. (1976) <sup>13</sup>C Knight Shift in TTF-TCNQ (<sup>13</sup>C): determination of the local susceptibility. *Physical Review B* 14, 2746–2756.

Sandford, S. A. and Stardust organics preliminary

examination team (2006) Organics captured from comet 81P/Wild 2 by the stardust Spacecraft. *Science* **314**, 1720–1724.

- Sephton, M. A. (2002) Organic compounds in carbonaceous meteorites. Natural Product Reports 19, 292–311.
- Weinbruch, S. and Muller, W. F. (1994) Cooling rates of chondrules derived from the microstructure of clinopyroxene and plagioclase. *Meteoritics* 29, 548–549.
- Wlotzka, F. (2005) Cr spinel and chromite as petrogenetic indicators in ordinary chondrites: Equilibration temperatures of petrologic types 3.7 to 6. Meteoritics and Planetary Science 40, 1673-1702.
- 藪田ひかる(2008) 隕石有機物の構造・同位体分析 による母天体変成過程の化学的解明. Researches in Organic Geochemistry 23, 73-97.